

平和メッセージ

今年は、戦後80年という節目の年です。そんな2025年を、私は平和な暮らしのもと、迎えることができました。家族や友人とともに、日々を平穏に暮らすこと。私たちは普段、これを当然のことに感じていますが、それが当たり前ではなかった時代がありました。

今年の3月、私は滋賀県の次世代戦跡訪問事業に参加し、鹿児島県を訪れました。私はそこで、現代では考えられないような戦争の時代の異常なさまを、いくつも目の当たりにしました。訪問先で教えていただいた数あるお話のなかで、私がもっとも衝撃を受けたものをご紹介します。

藤井一（はじめ）少佐は、特攻を志願していたものの、軍からの許可が下りずにいました。そんな中、彼のもとにこんな一報が届きます。彼の妻と2人の娘が、遺体となって川で発見された、と。妻の遺書にはこう書かれていました。「私達がいたのではこの世の未練になり、思う存分の活躍が出来ないことでしょう。一足お先に逝って待っています。」

このことが軍に伝わると、ついに藤井少佐の志願は受理され、藤井少佐は妻と娘の後を追うようにして、散華されました。

子どもとともに心中することが夫の力となり、ひいてはお国を助けることとなる。妻の下したこの決断に、私は驚きを禁じえませんでした。自分たちが人生を命ある限り生き抜くことより、自らの手で命を終えてまで戦争に勝つことが優先されてしまう。人をそのような思考に至らしめる戦争の状況の異様さに、私は恐怖を覚えました。

また、私は先ほど「散華」という言葉を用いましたが、この言葉は「花と散る」の意で、戦死を美化する言葉です。これもまた、戦争の異常さを表していると思います。死を美化することで、肉親を失うつらさ・無念さや、日々激しくなる戦況、苦しくなる一方の生活状況など、戦争のおどろき実態から目を背けさせるようなこの言葉にも、私は疑問を感じずにはいられませんでした。

しかし、世界では今も戦争が繰り返されています。人間が「死者〇〇名」のように単なる「数」と化し、命の尊厳が損なわれ、家族を、社会を、国家を引き裂いてしまう戦争が、今、この時にも世界で繰り返されているのです。

私たちは、戦争を「体験」しなければ戦争を理解することができないのでしょうか。戦後80年、日本に戦争体験者の割合が年々少なくなる中、戦争のない世の中を作り上げるために私たちの世代にできることはないのでしょうか。

鹿児島への戦跡訪問の最後に、富屋食堂を訪れました。食堂を営み、そこで何

人もの特攻隊員を見送られたことで、「特攻の母」と呼ばれた鳥濱トメさんは、
こう言い残されたそうです。

「彼らの死を、決して無駄だったと言わないでほしい。」

彼らの死を無駄にしないということ。それはすなわち、８０年前の過ちを二度
と繰り返さないということ。そのために今私にできることは、８０年前の事実
目を背けることなく知り、学び、戦争体験者の記憶をさらに次の世代に伝えてい
けるかどうか、ということに他ならないと思います。これこそが、戦争を「体
験」していない私たちの世代が果たすべき責任である、ということ、この度の
次世代戦跡訪問事業に参加して強く意識することができました。

戦後に築き上げられた平和を享受する者の一人として、きっとその責任を果た
していくことを誓って、私の平和メッセージとします。

令和７年８月３０日

滋賀県立膳所高等学校２年 柴野真秀子